

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2022年10月23日
文責：JUN

若い教師が成長するとき

1 教師志望の減少と教師の仕事

若い人の教師志望が減少している。若い人だけではない。病休や産休の代替教員を見つけることにも苦勞するようになった。それほど教師という仕事が、以前と比べて敬遠されるようになったのだ。子どもたちは未来の社会を担う大切な存在だ。子どもがどのように育つかによって私たちの未来は異なるものになる。にもかかわらず、その仕事に就きたいと思う人が減少しているのは由々しき問題だ。この現実には、教師だけではなく、誰しものが危機感を抱かなければならない。

教師の仕事は大変だと思われているからかもしれない。教師が果たさなければならないこと、それは、学力面に対してだけではない。心の問題に対しても、健康面に対しても、もちろん保護者への対応についても繊細で熱意ある対応を行わなければならない。しかも、子どもは一人ではない。何人もだ。それらの子どもに対して、もちろん十把一絡げにではなく、一人ひとりに応じた対応が求められる。それには、肉体的にも精神的にもかなりのエネルギーを必要となる。

けれども、教師たちは教師であることに自負と意欲を抱いている。未来を担う人づくりという仕事への誇りだと言いたいところだが、そんな高尚なことではなく、もっとシンプルに、子どもたちと向き合う仕事が楽しいからだ。自らの努力で、子どもの成長が感じられる、子どもたちが笑顔になる、それがたまらなくうれしいのだ。しかも、教師の仕事は、決められたことを決められたように行うだけではなく、ある程度自分自身の発想とアイデアによって行うことができる。それは簡単なことではないけれど、これほどやりがいのあることはない。私は、教師の仕事の最大の魅力はこの創造性にあると思っている。

にもかかわらず、教師を志す若い人が減っているのだ。そんな現状に対して、私たち教師は、教職の魅力をもっとアピールしなければならないのではないだろうか。

教師になって間がない若い人は、ゆめと希望を抱いて教職に就いたにもかかわらず、最初の一年で現実の壁にぶつかる。しかし、その壁をこえたとき、多くの人は、教師になった喜びを味わうことになる。子どもと向き合う仕事の醍醐味を知るからである。

私は、今こそ、そういう若い教師のありようと、そこから生まれた澁淵とした姿を、就職を控えた学生たちに知ってもらわなければならないと思っている。そうすることで、教職の本当のやりがいと価値がわかってもらえると思うからである。

ここに、思うようにならない壁にぶつかり乗り越えた一人の教師の出来事がある。私が訪問する学校で、このような事例が次々と生まれている。これはその典型的事例である。

2 ある若い教師の悩み

S先生は教師になって2年目である。初任の昨年度は、前年度の1年生においてベテランの先生の指導を受けた2年生の担任だった。その経験を生かせば十分やっつけていける、そういう判断のもと決まったのだろう、彼女は本年度1年生の担任になったのだった。

その一年間が始まって1か月ほど経った5月、私は、その年度はじめて彼女の学校を訪問した。

全学級の授業を参観し、そのうえで、先生方との研究協議を行い、校長室に引き上げたのは午後4時半を回った頃だった。そこへ、私を追いかけるようにしてS先生がやってきたのだ。彼女が顔を出したのを見た瞬間、私はそのわけを察した。彼女は、自分が担任することになった1年生のことで私に相談しにきたのだ。

私がそのように察したのは、子どもたちへの対応で苦勞している姿を、午前中の授業で目にしていたからである。S先生が語りかけてもしゃべっている子どもがいる、何度も指示しないと指示したようにしようとしない、机を隣同士くっつけるペアにしてあるのだが学び合おうとしない、立ち歩く子どももいる。そんな子どもたちを前に、どうしてよいか分からない、そういう状態だったからである。

目の前の席に腰を下ろした彼女に、「よく相談する気持ちになったね。困っていること、聴くよ。話してみて。」と声をかけた。私の促しを受けたS先生は、伏し目がちに訥々と語り始めた。彼女との応接は15分ほどだったろうか。私が伝えたことは主に二つだった。一つは、急がなくてもよい、時間がかかってもあなたの気持ちは子どもたちに伝わるといこと、そしてもう一つは、子どもたちの目を見て、自分の言葉と気持ちを子どもたちに届ける、そういう気持ちを強く持って話すこと、この二つだった。

私は、どこの学校を訪問しても、見せてもらったすべての授業に対してコメントをするよう心掛けていた。在校中に、そのための時間が設定されている学校においては、そのとき話すのだが、その設定がない学校に対しては、後日、コメントを文章にしてメール添付で送る。S先生に対しては、校長室で話のできたのでそれだけでもよかったのだが、他の先生方へのコメントを綴っているうち、彼女に対してももう少し声をかけたくなった。私が彼女に送った文章は次のようなものだった。

- S先生が最後に校長室まで来てくださったこと、本当にうれしく思いました。もちろん、それだけ、どうしていったらよいのだろうと不安感を抱いておられたからで、そんなS先生のお気持ちを考えれば、私が喜んでいられるだけではいけないのですが、私たち教師が子どものために一生懸命になる熱意は必ず子どもに届くと思っているので、その熱意をS先生に感じたからうれしかったのです。
- 上手にやろう、早く落ち着かせようと焦って考えるのではなく、大きな変化よりも小さなよい兆候を喜ぶようにするといいです。そして、その喜びを子どもたちに伝えるのです。それは、どうすることがよいのかという価値観を子どもたちに示すことになるからです。
- 1年生の子どもたちにとって自分たちの先生はS先生なのです。先生としては、心の内でいろいろ迷うことはあると思いますが、子どもたちに対しては、頼りになる私

たちの先生だと思えるよう、自信をもってやっていってください。私は、子どもたちにとって「学校のお母さん」、頼もしくしてなきゃ、それくらい思っていていいですよ。

- 机の並べ方を2人ずつのペアにして、それをコの字に並べたのはとてもよいことです。それは、聴ける状態にするためのよいからです。でも、発問が子どもに分かりにくいようです。そうならないようにするためには、突発的に出す発問は別にして、中心的な発問は、事前によく考えておくといいです。聴いていない子がいたら、そのままですまないで、ゆっくりと子どもにこう告げるのです。「先生が質問を2度言うよ。後から、どんな質問だったか、言ってもらおうね。」と。……聴けていなかったら、もう1回同じことをしてもいいです。とにかく、聴かなければいけないという状態をつくるのです。夏休みまで粘り強くやってみてください。

3 たった4か月後に

二度目のS先生の学校への訪問は9月中旬だった。

S先生の授業の参観は4時間目に組まれていた。私の頭には、4か月前の子どもたちの様子と、校長室で話すS先生の姿が浮かび上がっていた。そして、あれからどうなっているだろうか？という、期待と心配の入り混じった気持ちになっていた。

教室に足を踏み入れる。私の目に子どもたちの姿が映る。その瞬間、自分のことでもないのに、私は緊張した。けれども、その緊張は一瞬にして氷解する。語りかけるS先生の顔に、すべての子どもの顔が向けられていたからである。これはすごい!! ときどきする鼓動のまま、私は静かに腰を下ろした。

S先生の授業は算数、単元は「大きな数」だった。一つ目の課題を終えた後、S先生が子どもたちに見せたのは、何本かのプラスチック製の棒を束にしてゴムバンドでしばったものだった。そして、提示した課題は、「棒は何本あるか、数えてみよう」だった。

S先生はゴムバンドでしばった数え棒を全員に配る。子どもたちは、すぐ数え始める。机はペア型になっているから、お隣のやっていることに目をやったり、相談したりしながら、どの子どもも数えている。

しばらくして、先生から声がかかる。

「ハイ。一回、手をお膝に置いてください。」

驚いた。どの子どもも一斉に数え棒から手を離し、顔をS先生の方に向けたからである。4か月前にはなかった光景である。しかし、私の驚きとうれしさはこれだけではなかった。ただお行儀よくできるようになっただけではなかったからである。

S先生 よく頑張って数えましたね。……1回だけじゃなく、何回も数えた人がいました。頑張りました。……では、どうやって数えたのか、隣のお友だちに聴いてみましょう。

子どもたち (再び数え棒を手にし、隣同士、互いに数え方を見せ合う)

S先生 はい(子どもたちが顔を上げる。けれども、まだ数えている子どももいる。S先生は黙って子どもたちの様子を見つめる。その「間」で、どの子の手も数え棒から離れる)

S先生 では、話、聴かせてください。……Eさん。

E えっとね……まず(数え棒を)全部並べて、……それからね、1本1本、こうやってね、違う場所に持って行って数える。

S先生 やってみて。テレビ(モニター)に映すから(と言って、タブレットで撮影する。撮影された映像が教室左前に据えられているモニターに映し出される。もちろん動きがわかるように動画で見せている)。

S先生 きれいに並べてるね。……みんな、見える？(モニターを見ている子どもたちがうなずきながら見入る。Eの周りの子どもは、モニターではなく、Eの手元を見ている。)

E 35, 36, 37, 38……。(1本1本数えていた棒が次第に少なくなり、最後の1本になったとき、声を張り上げ) 39や!

S先生 ほおっ! 39だったんだ。……よく頑張って数えたね。……Eさんの同じやり方で数えた人、私もいっしょだよっていう人?

子どもたち (半分以上の子どもが手を挙げる)

S先生 そしたら、別のやり方で数えたよっていう人?

(Bという子どもの手が挙がる。)……じゃ、Bさんのを見てみよか。(そう言って、タブレットを持って行って、右の写真のように動画撮影をする)

B (まず、1本1本数え始める。ところが、棒が10本になったところで、次の11本目を少し離れたところに置く)



S先生が子どもたちに示した課題は「棒は何本か、数えてみよう」というものだった。その際、どのように数えるかということは示さなかった。だから、半数以上の子どもが1本1本数え足すという数え方をしたのだ。しかし、子どもたちに気づかせたいのは、10のまとまりを作って数えるという数え方の良さである。それは、たし算の繰り上がりともつながることであり、何よりも10集まれば一つくらいが上がるという十進法への気づきの第一歩になることだったのだ。

それならなぜ、最初からそのように数えさせなかったかということだが、「数え足す」数え方も経験しなければ、10のまとまりをつくる良さを本当には味わえない、そう考えたからだろう。

それで、まずは「数え足し」を発表させて、そのうえで、「別のやり方」ということで、Bという子どもの数え方を発表させたということだった。

この進め方は、多くの教師が行っていることにちがいない。けれども、S先生の子どもの状況に合わせたゆったりとした持っていき方は、とても分かりやすいものだった。しかも、この後、立て続けに、臨機応変な対応をして、それが学びの深まりにつながっていったのだ。

すべての子どもが、棒の数は39本だと数えられた後だった。それを受けてS先生が新たな課題を出したのだ。

「お隣の数え棒とガッシャンコしたら、さあ、何本になるでしょう」と。

そのとき、子どもの人数の関係でペアがつかれず、3人で1組になっているところがあった。その子どもから「私たちはどうするの?」という質問が出た。そしたら、「3人でガッシャンコ」という指示をしたのである。その瞬間、子どもの中から声が出た。「ええっ、そしたら、絶対、100超えるで!」と。それは、ジャンプのジャンプと言える課題になったのだ。

5月にあれほど悩んでいたS先生が、子どもたちを引き付けたこんな授業を行った、それは、彼女の意欲と努力によるものにちがいないのだが、それとともに、若い教師の可能性の大きさを示すものだと思えた。

後日、私は、いつものように文章によるコメントをその学校に送った。

- とにかくうれしかった。S先生が生きていてほっとした。よかった。ほんとによかった。その気持ちを伝えたくて、研究協議での話の最初に、あなたの授業は研修会で検討する対象ではなかったのに、映像を交えて皆さんに話させてもらいました。
- この変化は、教室に入ってすぐ分かりました。子どもたちの目がS先生に向いているのです。そして、学びに素直に向かっています。そういう子どもたちの前にいるあなたはほんとに落ち着いているのです。いえ、落ち着いているだけではありません。余裕さえ感じました。それは、子どもにかけ言葉に、間があるし、子どもたちに「これ、こうじゃない?」「これ、面白いでしょ!」と語りかけているような気持ちがこもっていたからです。そのS先生の言葉は、しっかりと子どもたちに向かって発せられていました。これは教師としてもっと大切なことです。子どもに思いを届ける、子どもに語りかける、子どもと気持ちをつなげる、そのための言葉になっているということなのですから。そして、子どもといっしょに学びができることを楽しんでいるという感じも表れていました。それは子どもにとってとても心地よいものにちがありません。ほんとによくなりました。うれしいことです。
- 子どもたちから、10ずつに区別して数えるという考え方がなかなか出なくても、S先生は決して慌てていなかったですね。それどころか、そういう状況を想定していたようにも感じました。
- さて、この1時間の学習課題についてみてみましょう。最初はカレンダーの虫食いでした。そこに数字を入れました。そして、次に、数え棒の数を数える課題でした。さらに最後は、ペアの相手と、数え棒をガッシャンコしたら何本になるかというものでした。よく考えましたね。特に、ペアの友だちとガッシャンコはよいアイデアでした。そのとき、3人になっているところがあって、S先生が、ふと思いついたように「あっ、ここ、3人ガッシャンコ」と指示されたのだけど、それを聴いて私は「ああ、いい!」と思いました。するとそのとき、別のペアの子どもが「絶対、100超えるで!」とつぶやいたのです。自分たちがすることでもなく、子どもは「面白い!!」と思うとこうした声を出します。素晴らしい瞬間でした。即興的にこういう対応ができるっていいですね。
- ただ、これは、研究協議で映像を観ていただいたときに申し上げたことですが、ジャンプの課題で提示された棒の数を数える活動において、ほとんどの子どもが、せっかく学んだ「10のまとまり」をつくることをしないで数えていたのは残念でした。どこに原因があったのでしょうか。ジャンプの前の課題において、10のかたまりを作って数えていたことを子どもたちに見せていたにもかかわらず、どうして子どもたちはその方法をやろうとしなかったのでしょうか。それは、そのとき全員にその方法でやらせていなかったからです。どちらが正確に数えられるかということは、数え足しも10のまとまりで数えることも、両方ともやってみなければ判断できないことなのです。すべての子どもに経験させる、そのことの大切さを学びましたね。

4 若い教師が成長するとき

この授業を目にして、S先生は、今、教師であることの良さ、手ごたえを感じ始めているのではないか、私はそう思った。それは、子どもたちが自分にしっかり顔を向けて聴けるようになった、ほぼ、自分の進める方向で学べるようになったということだけで感じたことではない。

確かに、4か月前は、それができていなくて悩んでいた。けれども、私が思ったS先生の教師であることの手ごたえは、そういった教室の秩序ができたということではない。

「打てば響く」という言葉がある。S先生と子どもたちのやりとりに、そういう感じが存在していたのだ。それは、日々子どもと向き合う教師にとって、もっとも大切なことである。人が人を対象として行う行為において信頼の感情は不可欠である。相手に向ける言葉や思い、それに応える相手の反応、そのやりとりによって、分からなさが共有され、探究の方向が生まれ、そこから気づきが生まれていく、そのとき、人は、他者とともに在る意味と喜びを感じる。子どもにはそういう具体的な実感はないだろうけれど、そういう感触は、子どもたちの表情に表れる。それが、この授業で生まれている、そう思った。

夢中で授業をしているS先生には、そういう感触を味わう余裕はなかつただろうけれど、子どもとのやりとりに心地よさを感じていたにちがいない。教師は、だれしも、この心地よさを味わいたいのだ。

冒頭で述べたように、教師の仕事には苦労が多い。人を対象とする、しかも一人ひとりに学びを生み出さなければならない、それぞれの成長につなげなければならない、それは簡単なことではない。学びの題材への深い洞察、教師としての技量を高める研鑽と研究を行いながら、子ども一人ひとりに寄り添い、心を砕き、知恵を絞る、そのとき発生することは多岐に亘り、複雑である。決してマニュアル通りに行えるものではない。瞬間、瞬間の判断が求められることである。

教師が成長するとはどういうことか、もし私にそういう質問がされたら、それは、いくつもの経験を積むことだと述べるしかない。ただ、その経験は、ただ授業をし、教師としての仕事をこなせばよいということではない。自らのありようを常にみつめ、ふり返り、そこで生まれたものを次につなげていく持続的経験である。私はそのことを「内省的実践」と言い表している。それは、ドナルド・ショーンの述べた「反省的实践家」という専門家像とつながることである。

S先生のたった4か月の成長は、彼女の教師としての成長の序章に過ぎない。しかし、教師になって2年目に、この感触を味わうことができたということの大きさは計り知れない。きっと、彼女は、このような感触と喜び、教師としての手ごたえを目指して、これからも「内省的実践」をやっていくにちがいないと思うからである。

ただ、このような教師の成長にとって必須のことがある。それは、学校の同僚性である。「若い教師が育つ学校はよい学校である」とおっしゃった人がいる。まったくその通りである。人は他者とのかかわりで育つ、だから、どういう他者とどうにかかわりをするかで育ち方はちがってくる。S先生がたった4か月でこれだけの変化を遂げたのは、彼女の学校の同僚性に負うところが大きい。

教職に就きたがらない若い人が増えていると述べた。けれども、こうしたS先生のような事例を知れば、教職への憧れが生まれるのではないか、そう思う。学校はそんな人たちを待っている。